

## ● 水稻の収量・品質向上をめざしましょう！ ●

昨年のお米は、高温により乳白米などが多発し、農産物検査1等の比率は大きく低下しました。しかし、1等米は美味しいお米の基本です。今年は十分な高温対策をたて、不良環境に対応できる「元気なイネづくり」で1等、多収をめざしましょう。

### 1. 作土はできるだけ深くしましょう。

作土の深さは、水稻にとって15~20cmが良いとされますが、最近では大型機械で速度を上げて耕すため、また深い水田は代かきや田植えなどの作業効率が悪くなることから、作土が浅くなる傾向にあります。しかし、作土が浅い水田は根の張りが劣り養分の吸収が悪くなり、収量が低くなるとともに高温年は乳白米や黒点米が多発することがわかっています。

秋にプラウで深く耕すと、有機物(ワラ)の分解が進み、雑草も少なくなると言われていています。ロータリだけで耕すならば、耕深を深く設定し、作業速度を遅くして耕します。また、ほ場が乾いている時のほうが深くなります。作土が深いことは1等米生産の基本です。少しでも深くなるように心がけましょう。

### 2. 土壌中のりん酸、ケイ酸は十分に。土壌診断で確かめましょう。

りん酸が少ないと生育が劣り、分けつや穂が少なくなって減収します。ケイ酸が少ないと、病気や害虫に弱くなります。また、光合成能力が低下し、高温年には乳白米や黒点米などが多発します。

水田土壌中にりん酸、ケイ酸がどのくらいあるか、何年かに一度は土壌診断で確かめましょう。りん酸の基準は乾土100gあたり10~30mgで、ケイ酸は30~40mgです。基準値より低い場合は「ようりん」「苦土重焼燐」「ケイカル」などを施用します。

### 3. 施肥法と水管理

最近では温暖化の影響により、出穂期や成熟期が早まる傾向にあります。収量・品質向上のためのコシヒカリの適切な穂肥施用時期は、出穂期の15日から10日前です。幼穂長などから出穂期を予想し、適期に追肥を行いましょう。

また、「コシ一発かんだ君」などの全量基肥肥料の施用は、「田植えの2週間前から代かき前」が適期です。時期が早すぎると、緩効性窒素の供給がイネの生育に合わなくなり、収量や品質が悪くなる可能性があります。適期施用を心がけましょう。

水管理も収量・等級・食味に大きく影響します。田植え後30日~40日になったら中干を5~10日程度行い、その後は水田の土が少し見えたらすぐ水を入れる間断かんがいを行います。このことにより過剰分けつを抑え、根の活力を維持することができ、乳白米の多発を抑えることができます。

### 4. 地力(可給態窒素)は大丈夫?

地力の目安として可給態窒素(地力窒素)があります。これは土壌中の有機物にふくまれる窒素のうち、微生物に分解されやすくゆっくと作物に供給される窒素です。可給態窒素は全農いばらきの土壌診断で測ることができますが、明確な基準値はありません。大まかな目安として、乾土100gあたり「25mg以上は肥沃、20mgは中程度、15mg以下はやせたほ場」と考えられます。

可給態窒素が多いほ場は一般に粘土が多く、多収であることが多いのですが、化学肥料のやり方によっては倒伏しやすくなります。少ないほ場は砂が多いなどで収量は低くなりがちですが、穂肥を適切に施用するなどにより、収量を上げることができます。特に可給態窒素が少ないほ場で穂肥が足りないと、窒素の不足により光合成能力が低下し、高温年は乳白米などが多くなります。

近年、水田土壌の可給態窒素は全体に減少傾向にあります。原因は有機物(堆肥)の施用量が少なくなったこと、基盤整備で乾田化が進んだことなどが考えられます。また、温暖化や麦・大豆とのローテーション栽培、WC Sや多収米の栽培なども影響しています。

### 5. 堆肥の施用を考える。

最近「水稻の緑の色が薄くなった」「収量が下がっている」「暑い年は乳白米などが多く等級が低い」「可給態窒素の分析値が低い」。そのような水田には有機物(堆肥)の施用が有効と考えられます。堆肥から供給される窒素により、収量が多くなるとともに乳白米などの発生を少なくする効果があります。可給態窒素を高める堆肥は牛ふん堆肥です(鶏ふん堆肥の窒素は化学肥料のように速効性で、豚ふん堆肥は牛ふん堆肥と鶏ふん堆肥の中間です)。ただ、堆肥の施用には十分注意が必要で、特にコシヒカリの場合、牛ふん堆肥は10aあたり1トン以内にとどめ、葉色、生育、倒伏、収量などを観察して連用するかしないか、施用量を加減するかなどを決める必要があります。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

■ 営農NEWSはJA全農いばらきホームページでもご覧になれます。